

## デューイの論理学における経験と思考の連続性

宮本伸吾

### はじめに

本稿は、ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の論理学において経験と思考の連続性がどのように見出されるのかを明らかにするものである。

デューイによれば、経験から思考をはじめべきである。しかし、それは容易なことではないはずだ。経験による学びは、特殊な環境との関係で生じる感情や感覚に依存する。他方、思考は推論によって、一般的に成り立つ知識を獲得するものである。その意味で経験と思考は、非合理性と合理性の極を代表しているようにさえ思われる。実際、歴史的には経験と思考は矛盾するものと考えられてきたのであり、デューイによる経験の再定義は、そうした伝統への挑戦であった。このことを踏まえると、経験から思考をはじめることには多分に困難が伴っていると考えられる。デューイにおいて、それはどのように可能となったのだろうか。こうした問題関心から本稿は、デューイにおける経験から思考をはじめする方法を検討する。

経験と思考の連続性を明らかにすることには次のような利点がある。思考において感情は合理性のために邪魔なものとは見なされない。むしろ感情それ自身が合理性を表現していく方途に目向けられる。リチャード・シュスターマンによれば、デューイの主目的は経験を改善するという美的・実践的なものである。そしてそのために、身体 - 精神や経験 - 思考といった連続性を強調し、経験を探求の焦点にしている (Shusterman 1997:170)。つまり、デューイの連続性は、経験のための思考の理論を目的としている。また、リチャード・バーンスタインによれば、デューイの感情的・美的な経験の完成の考え方は、彼の社会的ヴィジョンにとっても重要となる。デューイは生活における分裂や疎外に心を痛め、経験の持つ意味を拡充できる教育と社会改革を求めた (Bernstein 2010:148)。すなわち、感情が疎外されずそれ自身で知性を表現する完成の概念が、デューイの社会的ヴィジョンを導いている。このように経験と思考の連続性は、非合理的な要素自体が合理的なものへと変わっていく思考の理論を可能にするものである。

ただし、経験と思考の連続性を論じる際には、近年プラグマティズムを巡って論じられている問題を念頭に置く必要がある。第1章でも詳しく述べるが、リチャード・ローティによれば、デューイの経験概念は思考を基礎づけている。この意味で、デューイはかつて経験が思考と対立させられたのと同じ方法を用いていることになる。例えば、超越論的に持ち出された「精神」が思考を説明することで、「身体」が思考から締め出されるという方法である。ローティの言うことが本当なら、デューイの経験の再定義の利点はそもそも否定される。なぜなら、「経験から思考がはじまる」と言うことで、経験よりも不合理と見なしたなにかを思考から締め出すかもしれないからである。そ

ここで本稿は、基礎づけの回避を念頭において、経験と思考の連続性を論じる。

基礎づけの問題は、デューイの論理学に目を向けることで、回避の余地がある。ローティは、経験の形而上学が思考の方法を正当化することを問題にしたが、思考の方法、つまり論理学と形而上学の関係に十分に目を向けていない。デューイにおいて、形而上学と論理学は相互関係を持っている。ラルフ・スリーパーは、「存在論を伴った論理学」とデューイの論理学を特徴づけており (Sleeper 1986:22)、「形而上学でさえ、探求の経験からその存在論を得るとみることができるだろう」と述べている (Sleeper 1986:51)。また、レイモンド・ボイスバートは「もし形而上学を存在としての存在の学、あるいはデューイ的な用法で存在の一般的特性の学として理解できるなら、方法的分析は存在論的考察との相互関係を明らかにするだろう」と理解する (Boisvert 1988:185)。松下晴彦も、「デューイの方法論としての論理学には、形而上学が排除されているどころか、必ずある (もちろんデューイ的な意味での) 存在論的な視座が伴っている」と主張している (松下 2002: 九八)。だとすれば、経験の形而上学が思考の方法を一方向的に正当化することはないと思われる。

しかし、スリーパー、ボイスバート、松下において、連続性と論理学がどのような関係にあるかは、十分に検討されていない。そこで本稿は、論理学と形而上学の関係に注意して、デューイの論理学における経験と思考の連続性がどのように見出されるかを明らかにする。

第1章では、ローティによるデューイの連続性への批判と、それを受けて展開された、経験と思考の関係の再解釈を巡る議論を取り上げる。またそこでは、形而上学と論理学の関係が十分に考慮されていないことを指摘する。第2章では、形而上学と論理学の関係に注意して、連続性について検討する。それによって、連続性は論理学の前提として位置づけられるにも関わらず、論理学によって確定されるものであることを示す。第3章では、デューイによる経験から思考をはじめの方法の記述を追い、論理学において経験と思考の連続性がどのようにして見出されるのかを明らかにする。

## 1. 経験と思考の連続性に伴う基礎づけの問題

### (1) ローティによる連続性批判

ローティは、プラグマティズムは経験という用語を捨て去るべきだと述べた。そして彼は、認識の領域を言語に限定する新しいプラグマティズムを論じた。この主張は、連続性の解釈にひとつの論点を投げかけている。それは経験と思考の連続において、経験が思考を基礎づけるということである。

ローティがデューイの経験の形而上学を批判する論点は、次の言明に端的に示されている。

経験を何らかの「一般的特性」の用語で考察できる立場がなければならない。それがひとたび認められれば、伝統的哲学論争のおもしろくない話題だった、主観 - 客観や精神 - 物質の二元論を生み出すような間違った仕方で、経験を記述することは不可能になるだろう。…しかしそ

これは将来の探求のために永遠の中立的母体を提供する点において、伝統的形而上学に似ていることになるだろう。(Rorty 1982:80)

経験を、主観でも客観でもあると説明したり、精神でも物質でもあると記述すれば、主観 - 客観、精神 - 物質の二分法を避けることができる。しかし、それだと結局、思考の行きつく先を経験へと限定する外在的根拠を再び持ち出してしまことになる。「私たちは、経験的自我と物質的世界の関係の問題を解決して、その両方を構成する超越論的自我で再び締めくくっただけではないか」(Rorty 1982:83)。

このようなデューイの形而上学の背景には、ヘーゲルの歴史主義とロック的自然主義の両方を扱おうとする考えがある、とローティは見る。ローティはこの指摘を、デューイの「自然主義的形而上学」は矛盾した用語であると批判するジョージ・サンタヤーナの論点を明確にするものと位置づけて、このように述べている。

おそらく、誰もロックとヘーゲルの両方に従うことはできない、と言うことで、この点を最もうまく提示することができるだろう。もしヘーゲルに同意して、哲学的思考の出発点が、その人の歴史的時代——その時代の人間の問題——に捕らわれた弁証法的状況に縛られているとするならば、誰も『『経験』の包括的な統合』と呼ばれるものについての「経験的」な説明など提出できないし、誰もこの「統合された統一体を哲学的思考のための出発点」と見なすこともできない。(Rorty 1982:81)

ヘーゲル的な歴史主義と、ロック的な自然主義を両立することは確かにできない。すなわち、「思考のはじまりは歴史に相対的な問題に依存する」と言いながら、「思考のはじまりは超歴史的な本性をもつ経験である」と言うことは矛盾である。ここで、ローティの「両方に従うことができない」の含意は、どちらかを棄て去れば良いということである。そしてローティが捨てるべきだと考えたのは、ロック的な自然主義であった。

ロック的な自然主義が非難される理由に、連続性が関係している。デューイの連続性は進化論的なニュアンスを持っており、経験が成長したものとして思考を記述する。ローティによれば、この連続性は、非認知的な経験と認知的な思考の区別を曖昧にしてしまう (Rorty 1998:295-296)。この区別を曖昧にすると、「心の作用についての機械論的な説明と、知識請求を『基礎づけること (grounding)』との混同」に陥る (Rorty 1979:140)。つまり、デューイは「経験から思考が発展する」という思考のメカニズムを説明するときに、思考の外にある経験と思考の区別を曖昧にして、連続させている。こうすると確かに、経験が思考の外から思考を正当化することになる。

ローティは、こうしたデューイの形而上学への批判に基づいて、次のように結論づけている。「デューイは『経験』という用語を捨て去るべきだったのであり、再定義すべきではなかった」(Rorty

1998:297)。この主張によって、経験と思考の連続性の議論には重要な論点が投げかけられる。シュスターマンも述べるように、ローティの批判は「経験の観念が曖昧にすることしかできない言語的活動と前言語的活動の、根本的な非連続性を主張しなくてはならない」ことを意味するものである (Shusterman 1997:158)。つまるところ、経験概念をどう評価するかが、デューイ的プラグマティズムとローティをはじめとするポスト言語論的転回のプラグマティズムの「分水嶺」となる (Shusterman 1997:158)。したがって、デューイの連続性を読み解くにあたり、経験が思考を基礎づけるという問題を無視することはできない。

## (2) 経験と思考の関係を巡って

シュスターマンとコリン・クープマンは、ローティの投げかけるこうした論点を受け止め、非認知的経験と認知的経験の関係を考察している。

シュスターマンはローティの連続性の解釈を明瞭にした。シュスターマンによれば、「デューイは、認知的経験と非認知的経験の連続性を力説する中で、後者が前者の真理の尺度として機能すると言い張っているのではない」(Shusterman 1997:161)。直接的経験は「持たれる (had)」だけであり、言語にとらえられるまで直接的経験の質は知られないのだから、知識を支持する根拠にはならない。このことからシュスターマンは、「言語のみが、知識の対象としての質を構成すると主張するなかで、デューイはすでに、認知的な正当化の領域はまったく言語的であることを要求する、言語論的転回を講じていた」とみなす (Shusterman 1997:161)。

そのうえでシュスターマンは、デューイの連続性の招いた基礎づけを次のように捉えなおしている。経験は、特定の知識を正当化することはないが、すべての思考を導かなければならない。こう主張する限りで、デューイは「より微妙な種類の基礎づけ主義」に陥っている (Shusterman 1997:163)。デューイの経験のもつ論理的機能は五つに整理できる。その機能とは (i) 思考が関係する状況の一つにまとめ思考に枠組みを与える機能、(ii) その際、思考が後に状況の中に見出し使用する対象や事柄を制御する機能、(iii) 文脈における判断の適切さの感覚を与える機能、(iv) 状況の方向性を決定し、時間が流れてもそれを保持することで、思考の進行に統一と連続の感覚を与える機能、(v) 物理的な近接や類似よりも適切な観念連合を生み出す機能、である。この局面において、デューイは超越論的な議論によって基礎づけられる現前の形而上学に向かう (Shusterman 1997:162-166)。シュスターマンによれば、デューイは知識の基礎づけを回避したが、思考の本性を基礎づけたのだ。

クープマンは、経験と言語の関係性を、基礎づけを回避して論じようとする。クープマンは、デューイはしばしば所与主義者の「一次経験 (primary experience)」や「知覚的即自 (perceptual immediacy)」と見分けがつかない仕方で、経験に言及すると認めている。なぜならデューイは、基礎づけ主義者への論争の初期に著述しており、まだ「経験」の認識論的役割へと適切に焦点化する概念的道具や哲学的比喩をもたなかったからである (Koopman 2007:697)。ただしあくまでクープマンが言いたいのは、デューイは基礎づけ主義者ではないが、基礎づけ主義を回避するのに十分な

理論的道具をもっていなかったということである。したがって、「経験」概念を安易に復活させることは「ウィルフレッド・セラーズが所与の神話として批判したものと見分けがつかなくなるような仕方では、経験が記述される」危険性を孕む、とクープマンは述べる。そして所与主義が看過されるならば、基礎づけ主義も看過されてしまう (Koopman 2007:696)。

クープマンは「推移主義的 (transitionalist) プラグマティズム」を提唱する。推移主義的プラグマティズムにおいては、「経験は其中で知識が発展する一時的な領域である」と捉えられる (Koopman 2007:710)。これは、経験を知識の基礎とするのではなく、知識が自己修正的に発展する場として、経験を位置付けるものである。クープマンは、言語の外に知識の根拠を求めない社会的言語実践を認識の場とするローティの戦略を、経験に適用したのだ。

このように、ローティによる連続性への批判に応答して、経験と思考の関係を捉えなおす動きがある。しかしこれらの議論では、デューイの形而上学的な前提が問題とされるにとどまっている。そのためそこでは、形而上学と論理学の関係が十分に考慮されているわけではない。デューイにおいて、形而上学は少なくとも論理学との相互関係をもっている。だとすれば、連続性という形而上学的前提は、論理学と関係づけて論じられる必要がある。

## 2. 論理学の前提としての連続性

### (1) 論理学と形而上学の関係

デューイは、論理学の中で形而上学を扱った。そのことは、サンタヤーナの批判に対するデューイの反論を読むことでわかる。

サンタヤーナは、デューイの形而上学を「中途半端で息切れしている」自然主義と批判した (Santayana 1925:680)。この批判は、経験の超越論的な説明を批判する点で、ローティの批判と同種である。そうだとすれば、デューイのサンタヤーナへの反論をローティへ間接的にぶつけることもできる。

サンタヤーナによれば「自然主義的形而上学」という用語は矛盾している。なぜなら、形而上学を破壊しようとする自然主義が、新たに形而上学を打ち立てているからである。サンタヤーナは、デューイの自然主義は、「前景の優位性」によって成り立っている、と断じている (Santayana 1925:678)。デューイが経験をわたしたちが直に持つ質的なものと説明したので、サンタヤーナは「前景」というメタファーをあてがう。デューイは「経験の事実は、単にある (are)、もしくはもたれる (are had) のであり、それらについてそれ以上言うことはない」とするだけで、なぜ経験が実在の基準であるのかについてろくな説明を与えない (Santayana 1925:683)。このような恣意的な正当化にもかかわらず、デューイにおいて経験は「宇宙の基礎 (basis) として横たわっている」 (Santayana 1925:685)。このように、デューイは形而上学を破壊しようとしたはずが、経験を基礎として再び形而上学を打ち立ててしまっている。つまり彼の自然主義は途中で息切れしたのだ。

形而上学を壊すための経験が、新たな形而上学の根拠になっている。このように言われたとき、デューイは次のように反論した。

これが私の「形而上学」の範囲と方法である——人間の苦悩、喜び、試み、失敗、そして成功の広範で不変の特質を、それらを特徴づけ人間の生きる世界の一般的特性を伝える芸術、科学、技術、政治、宗教といった制度とともに考察すること。その方法は、一定の観察や実験を行ったり、計算や解釈に利用可能な既存の観念群を役立てたりして、自然のある限定的側面について本当に何かを発見した、と結論づけるすべての研究者の方法と、みじんも違わない。もし『経験と自然』に何か新しさがあるとすれば、それはこの普通の人間の「形而上学」ではない。新しさは、哲学を悩ませてきた一群の特別な問題を理解するのに、そうした方法を用いていることにある、と言うべきだ。(Dewey HN:75-76)

デューイはこの箇所、科学者の思考の方法を用いて形而上学を扱うと言っている。また、そうした方法による新たな形而上学が、哲学を悩ませてきた問題を理解すると言っている。

これはローティも参照した箇所なのである。ローティに言わせれば、形而上学を壊そうとする科学者の「経験的方法」が、形而上学を構築するのはおかしい。またそうした「経験的方法」を根拠とする形而上学が、伝統的な哲学の問題を解消するのもおかしい (Rorty 1982:73-74)。「経験的方法」が形而上学により外から根拠づけられて、真の形而上学の方法だと主張されているなら、ローティの批判は正しいといえる。

だが、「経験的方法」が、外から正当化されていないなら、ローティの批判は誤りである。実際この箇所、デューイは形而上学に依存しない思考の方法を想定しているように思える。

ローティとの間で問題となっているのは、「思考の方法」、つまり論理学と「形而上学」の関係をどう考えるかである。ローティにおいては、「形而上学」が外から「思考の方法」を正当化している。しかし引用箇所は「思考の方法」が「形而上学」を正当化する、と読むことができる。デューイがサンタヤーナに言いたかったのは、科学者の「思考の方法」が「形而上学」に依存しないということだったと思われる。

なお仮に、「思考の方法」が正当化した「形而上学」が、循環的に「思考の方法」を正当化したとしても、「形而上学」は思考の外から「思考の方法」を正当化することにはならない。なぜなら、最初に「思考の方法」が「形而上学」を正当化すると認めた時点で、「思考の方法」が外側から根拠づけられることはなくなるからである。

スリーパーは、デューイにおいて論理学が形而上学を見出すと述べている。スリーパーによれば、「デューイの経験の論理学を、それに対して存在の形而上学の背景が形成する前景と見なすことは理にかなっている」(Sleeper 1986:61)。ここでの「前景」と「背景」はサンタヤーナのメタファーを意識したものである。スリーパーが言うには、「前景」(経験の論理学)が「前景」自身を正当化する「背景」(形而上学)を構築するのだ。「彼は批判の領域の地図として、つまりなぜ探求が必要

なのかと、なぜ探求が可能なのかを示す背景として、形而上学を再構成している」(Sleeper 1986:61)。

また、デューイは、『論理学』(Logic : Theory of Inquiry) のなかで、「論理学」と「形而上学」の関係について次のように述べている。

探求の探求としての論理学は、もし気に入るならば、循環の過程である。つまりそれは探求の外部にあるなにもものにも依存しない。この命題の力は、ひよっとすると、それが排除するものに注目することでもっともたやすく理解されるかもしれない。それは論理的な第一原理をア・プリオリな直観的営為によって決定、選択することを排除する。たとえその問題の直観が純粹悟性のものだといわれるときでも、同様にそうである。それは論理学を形而上学的、認識論的な想定や前提条件に寄りかからせることを排除する。(L:28)

論理学は、思考への思考という、循環の過程である。例えば、リンゴとバナナの取り方(思考の方法)を振り返ること(思考への思考)が論理学である。もしリンゴとバナナの取り方をまったく振り返らないとすると(思考への思考の不在)、ただがむしゃらに目の前のリンゴとバナナを収穫するだけになる。この場合、リンゴについては偶然にも、種を植え、木を育てて、収穫するという方法をとるようになったが、バナナについては、森林を適当に走りまわり見かけたら収穫するという方法を取り続けることもありうる。リンゴとバナナの取り方を振り返るとは(思考への思考)、例えばリンゴとバナナの取り方に共通点を見出すことである。すると、リンゴと同じようにバナナを収穫するといった取り方(思考の方法)も思い浮かぶ。このように、思考を振り返ることがより正当な思考の方法を見いだすため、思考の外から正当な思考の方法に根拠を与える形而上学は必要ない。

そして思考への思考という循環の中に、形而上学は位置を占める。「種を植えて、水をやり、収穫する」というリンゴとバナナの取り方の共通項を、「果物」と名付けることができる(形而上学)。すると、「リンゴとバナナは果物である」という形而上学は、リンゴとバナナの取り方(思考の方法)を規定する。このように、思考を振り返るなかで形而上学が発見される。そして形而上学は思考の方法を規定する。

ただし、ボイスバートは「論理学」と「形而上学」の関係についてのデューイのこうした分析は、「不正確であるだけでなく皮肉」だと言っている(Boisvert 1988:183)。というのも、「形而上学が論理学によって見出される」と言う場合、暗に、形而上学には「論理学によって明らかにされる」という性格が、超越論的に備わっていることになるからである。「もし形而上学を存在としての存在の学、あるいはデューイ的な用法で存在の一般的特性の学として理解できるなら、方法論的分析は存在論的考察との相互関係を明らかにするだろう」と、ボイスバートは理解する(Boisvert:184-185)。

松下は、「ボイスパートの指摘はやや極論にすぎる」、と述べる（松下 2002: 九七）。「論理学」が循環のプロセスだと論じた先の引用では、「形而上学」は否定的な意味での言及であるし、デューイの論理学は二元論への反駁をベースにしている。したがって、デューイは伝統的哲学的立場を排除しているにすぎない。だが、松下においても、基本的にはボイスパートと同様の見解が示されている。「デューイの方法論としての論理学には、形而上学が排除されているどころか、必ずある（もちろんデューイ的な意味での）存在論的な視座が伴っている」（松下 2002: 九八）。

論理学と形而上学の問題にこれ以上立ち入ることは避ける。なぜなら本稿の目的は、あくまで論理学と形而上学の関係に気を配りながら、連続性を論じることにあるからである。少なくとも、形而上学は論理学を外から一方的に正当化することはない。思考を振り返る論理学は、形而上学を決定する余地を持っている。

## (2) 論理学の前提としての連続性

論理学が形而上学を決定するのだとすると、連続性も論理学によって決定される。

デューイは、『論理学』のなかで「論理学の自然主義的理論の主要な前提は、より低い（より複雑でない）活動および形式とより高い（より複雑な）活動および形式の連続性である（L:31）」と述べている。ここにおける「より低い活動および形式とより高い活動および形式の連続性」は、本稿のテーマに沿った術語に置き換えるならば、「経験と思考の連続性」と言うことができる。「どんなものであれ生きている有機体が種から成熟へと成長し発展することが、連続性の意味を例証する」と言われるように、連続性は生命が成長して新たな活動形式が展開するようなイメージをもつ（L:31）。

連続性はこのようにある種素朴であり、むしろそれが意味しないことによって注釈される。連続性は、成長の原因としてまったく新しい外的な力が登場しないことを意味する（L:32）。それが起こると、「低次の活動形式」から「高次の活動形式」への発展は、「低次の活動形式」に外的な力のおかげだと見なされる。それだと「低次の活動形式」は、外的な力がなければ、「高次の活動形式」を発現できない。この記述では、「低次の活動形式」と「高次の活動形式」の間に「断絶」が生まれる。このような「断絶」に加えて、連続性は『より高次のもの』の『より低次のもの』への還元を意味しない（L:31）。なぜなら、それは「より高次のもの」を累積によって生み出すための「より低次のもの」という概念を外から持ち出すことになるからである。

連続性は論理学に外から課せられた前提ではない。デューイは、連続性の前提はむしろ論理学に決定されなければならない、と明言する。

発展を起こす理論は、実際に起こっていることの研究によって決定されるべき事柄である。それは、先行する概念的構造によって決定されてはならない。ただし、そのような構造は、直接的な観察や実験のために用いられるときには、仮説として役立つかもしれない。（L:30-31）

連続性という形而上学的前提は、思考を振り返ることで確定される思考の方法である。前提を確証

する権利は、形而上学ではなく論理学にある。

しかしもちろん、非合理性と合理性の葛藤はある。思考を振り返るなかで次のことに直面する。経験と思考という明らかに隔たった活動の形式がある。日々、「喉の渇き」を覚える。「喉の渇き」を潤すためには、水を飲まなければならない。このとき、水のきれいさや、冷たさ、うまさといった、環境との関係で生まれる質感に興味を抱いている。他方で、 $H_2$ や $O_2$ という化学反応式上の象徴に興味を抱くことがある。このときには、 $H_2$ と $O_2$ がどのような割合で結合するかといった非質的な象徴の関係性が問題となっている。水を巡る、まったく異なる活動の形式がある。従来ならば、前者を「経験」に、後者を「理性」のような超自然的な能力に帰したくなるような圧倒的な相違が、私たちの思考にはある。

自然主義的な前提に依る理論はどうしても、人類の活動や達成を他の生物学的な形式から区別する圧倒的な差異に直面しなければならない。これらの差異こそが、非自然的な源泉に由来する特質によって、人間は他の動物から完璧に隔たっているという考えを導いてきたのである。(L:50)

デューイはこの隔たりを、「新たな活動様式の変化及び発生」、「あらゆる水準の発達」の問題として受け止める (L:51)。これが経験と思考の連続性の問題である。経験からどのようにして思考をはじめめるのか。この思考の方法を見出すことは、自然主義者に課せられた挑戦となる。

もし人が超自然的なものを否定するなら、そのとき人は、連続的発展の過程において、いかにして論理的なものが生物学的なものと結び付けられているかを示す知的責任をもつ。この点は、強調に値する。というのも、もしこれに続く議論が連続的な道筋を満足に指摘するという仕事を達成し損ねたとしたら、そのとき失敗は自然主義的前提を受け入れる人々にとっては、その仕事をよりよく遂行する挑戦となるからである。(L:31-32)

このように、論理学において連続性は決定される。そうだとすれば、ローティの命題「デューイは『経験』を再定義すべきではなかった」には再考の余地がある。なぜなら、ローティは形而上学が経験の本性を決めると考えたが、デューイにおいて論理学も経験の本性を決めるからである。

ただし、論理学において連続性を確認するためには、経験と思考の相違に挑戦しなくてはならない。なぜなら、この反省に失敗する限り、経験と思考は断絶したままであり、超自然的な能力によって思考を記述するしかなくなるからである。

### 3. 経験から思考を始める方法

## (1) 経験すること

ここからは、デューイの経験から思考をはじめめる方法の記述を追い、論理学において経験と思考の連続性がどのようにして見出されるのかを検討する。まず、経験するとはどういうことかの記述を追う。経験は「低次の活動形式」に属するものであり、デューイにとってはこれが思考がはじまるべき地点である。

デューイによれば、人間を含むあらゆる有機体は、次のような仕方では生きています。

何であれ有機的生命は、環境を含む活動の過程である。それは、有機体の空間的限界を超えて拡大する取引 (transaction) である。有機体は、環境の中で (in) 生きているのではない。有機体は、環境によって (by means of) 生きているのだ。(L:32)

「取引」は「相互作用 (interaction)」とも呼ばれるが、生きている有機体と環境の不可分性を強調する。環境から切り離された標本のような有機体を想定し、それが環境の「中に」入っていて活動しているかのように考えることはできない。有機体は環境「によって」生きているのであり、環境から孤立した活動を考えることはできない。この「取引」「相互作用」と呼ばれる、生きている限りは逃れられない環境との結びつきの様式が、デューイにとっての「経験」を表現する。

デューイによれば、すべての「経験」は「衝動 (impulsion) として」はじまる (AE:64)。「衝動」は、有機体の環境への強い依存性を示している。これは、有機体が環境との明確な関係 (相互作用) を結ぶことを迫られている局面である。環境との相互作用を求めて、有機体がひとつの全体として外に、前に向かう動きが「衝動」である。例えば、それは生き物が食べ物を求めることのような全体的な動きであるが、食べ物を飲み込むときの舌や唇の反応といった個々の行動からは区別される (AE:64)。このような「衝動」が、環境との相互作用を確立するとき、経験が完了する。

こうした経験という有機体／環境の動きを表現しているのが、「連なり (series)」である。デューイによれば「ある活動は、それぞれ続く活動への道を準備する。これらは単なる継続 (succession) を形成するだけでなく、連なりを形成する」(L:33)。例えばこれは次のような活動の連鎖である。運動は、運動器官の遂行を求め、運動器官の遂行は、循環器による栄養運搬を求める。循環器は、消化器官に食べ物の消化を求める。最終的に、消化器官は、環境に対して食べ物を求める。ここで、環境に食べ物があるなら、有機体と環境の間の釣り合いは保たれる。一方、環境が食べ物を供給しない場合、有機体と環境の間に不釣り合いが生じることになる。不釣り合いは、釣り合いの回復のための活動を迫る。

藤武も述べているように、「連なり」は、進化論的連続性の原理に基づく概念であり、美的な経験及び、関係性の認知すなわち知性 (intelligence) の成立基盤となる(藤 1966: 十九、二十)。連続的発展とは、「連なり」によって新たな形式をもった活動が表現されることである。実際、有機体は環境とのつりあいを回復しようとする際に、新たな活動の形式を打ち立てる。「有機体と環境の関係 (すなわち相互作用の) の形式は回復するが、同一の条件が回復するわけではない。そして、この

「新しい条件に応じて適応様式を変えたり保ったりする能力は、有機的進化という広範囲な発達の源泉である」(L:35)。このような相互作用の形式の変化が、思考に相当する「高次の活動形式」を生み出すならば、経験から思考がはじまったことになるといえる。

しかし、「欲求から生じた衝動性は、どこへ向かうのかわからない経験をはじめめる」というように(AE:66)、衝動はそれ自体では方向性を持たない。衝動は赤ん坊の叫びのように、ただがむしやりに環境との釣り合いを探すだけである。それがやがて完了する経験は、特殊な環境に依存しており、思考との間には途方もない隔りがあるように思われる。問題は環境との不釣り合いに駆り立てられ、経験を完了しようとするこの衝動的な動きが、どうやって思考を表現していくかである。

## (2) 経験から思考へ

次に、デューイにおける経験から思考がはじまる方法の記述を追う。デューイによれば、「低次の活動形式」から「高次の活動形式」への変形の鍵となるのは、「言語」である。「言語」の使用は、経験と思考の相違を架橋して、両者の間に連続性を確立する。

経験は次のようにして完全には有機的でない活動形式を発展する。

純粋に有機的ではない活動やその結果が、存在し伝達されるための必要条件であり、結局は十分条件である言語の重要性は、このような事実にもみられる。一方で、言語は、厳密に有機体の活動から自然の連続性のなかで発生する。他方で、言語はある個人に他の個人の立場にたたせ、厳密な意味で個人的でなく、連帯した仕事における参加者 (participants)、あるいは「同志 (parties)」としての共通の立場から、ものごとを眺め、探求することを強いる。(L:53)

赤ん坊の「泣き声」は、最初はいかなる論理的な意味ももたない、衝動的な活動である。けれども、大人が「泣き声」に反応して赤子を抱きあげると、やがて赤ん坊は、「泣き声」を、抱きあげられるという「結果」のための「手段 (means)」と見なすようになる。幼少期の子どもがしばしば嘘泣きをすることは、赤ん坊がいつしか「泣き声」を手段として用いることを示している。このとき、「泣き声」は、「大人が赤ん坊を抱き上げる」ことの「記号 (sign)」となっている。赤ん坊と大人は、この「記号」によって、「大人が赤ん坊を抱き上げる」ことをイメージする。この共通イメージのために、「記号」は、「意義 (significance)」をもっている。こうした言語の使用は、共通の結果を達成しようとする状況に二人を立たせる、参加的な (participative) 活動である (EN:140)。このように有機体は、「言語」を使用する文化的な環境に依存して生きるとき、「意義」を伴う「記号」を見出す。経験は、言語を操る超越論的な力がなくとも、特別な環境と相互作用することで、「記号」を使用しはじめる。

ただし、「記号」のもつ「意義」は、多分に特殊な環境に依存している。これが、デューイが「記号」に与えている特性である。例えば「記号」は、現実の火を、現実の煙のための手段と見なすも

のである。あるいは、現実の雲を、現実の雨のための手段とみなすものである。つまり、「記号」においては「互いに関連する物事」に表象能力があるにすぎない (L:57)。これだと、物事がその環境においてどう関係するか、「記号」のもつ「意義」は依存する。

一方、思考にとって妥当な言語は、環境において起こっていないことについて表象できるものでなければならない。なぜなら、そうでなくては言語の意味は特殊な環境に依存するからである。ここには、デューイが「思考の主要な矛盾の一つ」と呼ぶものが生じている (DE:155)。すなわち、思考のきっかけは環境への依存にあるにもかかわらず、思考が発展するためには環境から離脱しなければならない。デューイはこの矛盾を「ほとんど打ち勝ちがたい困難」とまで表現する (DE:155-156)。デューイが経験を再定義する以前には、経験は受動的に観念連合をつくる不合理なもののみなされた。したがって、経験が環境を離脱して能動的に観念連合をつくらうとすることは、経験に課されてきた不合理性のレッテルと「矛盾」する。デューイはこのレッテルを取り去ることを目指して、この「矛盾」をあくまで経験が思考をはじめめるための (特殊な感情が一般性を含むための) 「困難」として引き受けている。

環境からの離脱もまた、言語の特性が可能にする。言語は「自身の特徴的な構造をもっていて、形式として抽象化できる」という特性である (L:52)。デューイはこのような言語を「記号」と区別し「象徴 (symbol)」と呼ぶ (L:57)。例えば、音や描画としての「火」や「煙」が結果を表示する機能をもったものが「象徴」である。「象徴」では、音や描画のような、現実の火や煙と「無関係な、または中立的な」存在が、結果を表示する手段とみなされている (L:58)。そのため、その無関係な媒体を自由に呼び起こすことができるなら、思うままに結果を表示することが可能になる。「象徴」は、環境に依存せず、「火」と「煙」を関係づけたり、切り離したり、あるいはまったく別の「石」と関連づけたりもできる。象徴は関係性への批判とその検証を可能にする。デューイにとって、言語が可能にするこうした抽象化は「反省の開始点」である (EN:152)。

このように、経験から思考をはじめめる方法は以下の通りである。まず、経験されるできごとを他のできごとのための手段とみなすことである。これは経験するできごとを記号として扱うこととなる。また、音や描画のような存在を、それらとは無関係なできごとの手段とみなし、象徴として扱うことである。音や描画のような、無関係な存在を媒体とすることで、象徴は仮説的結果の自由な表象を可能にするのである。

## おわりに

本稿は、論理学における経験と思考の連続性がどのようにして見出されるのかを明らかにすることを目的とした。第1章では連続性に伴う、経験による思考の基礎づけをめぐる議論を検討した。その議論においては、デューイの形而上学と論理学の関係性が十分に考慮されていないことを指摘した。第2章では、デューイの形而上学と論理学の相互関係に注意し、連続性について論じた。連続性は論理学の前提であるにもかかわらず、論理学によって確証されるものである。第3章では、経

験から思考をはじめの方法の記述を追い、経験と思考の連続性が論理学においてどのように見出されるかを検討した。

以上のことから、本稿はまず、論理学によって経験と思考の連続性が確定されることを明らかにした。そうだとすれば、デューイによる経験の再定義は、論理学を外側から根拠付ける形而上学ではないことになる。またそのうえで本稿は、デューイの論理学における経験と思考の連続性は、言語の機能によって確定されることを明らかにした。

しかし、「記号」と「象徴」という二種類の言語が思考においてどのように関連しているか、またそれが経験から思考をはじめていく方法とどう関係するかについては、今後より検討を深めていきたい。

〔文献〕

Bernstein, Richard J. 2010 *The Pragmatic Turn*, Cambridge : Polity Press.

Boisvert, Raymond D. 1988 *Dewey's Metaphysics*, New York : Fordham University Press.

Dewey, John 2008 *The collected Works of John Dewey, 1882-1953*. Ed., Jo Ann Bodydton. Carbondale, IL: Southern Illinois University Press (Early Works=ew, Middle Works=mw, Later Works=lw). DE = *Democracy and Education* (1916 mw.9) EN = *Experience and Nature* (1925 lw.1) HN = "Half-Hearted Naturalism" (1927 lw.3) L = *Logic – Theory of Inquiry* (1938 lw.12)

藤武 1966 「デューイにおける進化論的原理——とくに連続について——」『日本デューイ学会紀要』第七号、十四—二一頁。

Koopman, Colin 2007 "Language is a Form of Experience: Reconciling Classical Pragmatism and Neopragmatism." in *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, Vol.43, No.4, pp.694-727.

松下晴彦 2002 「デューイの論理学における「形式」概念について」『日本デューイ学会紀要』第四三号、九五—一〇〇頁。

Rorty, Richard 1979 *Philosophy and The Mirror of Nature* New Jersey: Princeton University Press.

Rorty, Richard 1998 "Dewey Between Hegel and Darwin" in *Truth and Progress: Philosophical Papers, Volume 3*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.290-306.

ローティ, リチャード 2014 『哲学の脱構築：プラグマティズムの帰結』（室井尚ほか訳）筑摩書房。

Santayana, George 1925 "Dewey's Naturalistic Metaphysics." in *The Journal of Philosophy*, Vol.22, No.25, pp.673-688.

Shusterman, Richard 1997 *Practicing Philosophy : Pragmatism and the Philosophical Life* New

York : Routledge.

Sleeper, Ralph W. 1986 *The Necessity of Pragmatism: John Dewey's Conception of Philosophy*,

New Haven : Yale University Press.

## **Continuity of Experience and Thought in John Dewey's Logic**

MIYAMOTO Shingo

The purpose of this paper is to clarify how continuity of experience and thought is found in John Dewey's Logic. In doing so, I keep in mind the problem that Richard Rorty pointed out to base our claims to knowledge on experience.

First, this paper examines Rorty's criticism of continuity of experience and thought. As well as the debate on the reinterpretation of the relationship of experience and thought formed by it. In this section, it is pointed out that the relationship between Dewey's logic and metaphysics has not been fully taken into account in both cases.

Second, this paper discusses continuity and pay attention to the relationship between metaphysics and logic. By doing so, it is found that the continuity can only be determined by logic, although it is positioned as the postulate of logic.

Finally, this paper traces Dewey's description of how to start thinking from experience and explains how the continuity between them can be determined.

This paper concludes as follows.

1. Dewey's continuity of experience and thought is confirmed by logic. Therefore, continuity is not a metaphysics that grounds logic from the outside.
2. The continuity of experience and thought in Dewey's logic is determined through the function of language.